

日本の美しい助産に触れて

ステイシャ・バーザル

米国・プリンストン大学学生

私は文化人類学専攻の学生として、日本の助産と出産を文化的・社会的な面から研究している。卒業論文を書くために、日本の助産婦さんたちの現在の仕事、昔のお産婆さんとのつながり、そして助産婦という職業が将来どのように変わっていくのか調べている。私は日本で生まれ育っているが、今通っているプリンストン大学を来年卒業後、アメリカで助産婦学校に行き、将来は助産婦になるつもりだ。今回、助産婦の研究のために日本を選んだ理由には個人的な動機もあった。

日本で初めて助産婦さんとお産に立ち会ったのは、東京の聖母病院だ。4時間も一人の産婦さんに付き添って、陣痛が強くなった頃から赤ちゃんが生まれる時まで、産婦さんの隣で助産婦さんの働きを見た。その若い助産婦さんはとても優しい手と言葉で、苦しんでいた産婦さんに力を与えながら、穏やかに支えていた。分娩室に入ったら、助産婦さんはかなり大きな赤ちゃんを上手に取り上げた。病院でも助産婦さんは、医療に組み込まれた産婦さんにも喜ばれるいいお産を体験できるようにしてくれるので、とても素晴らしいと思う。

しかし、日本で見て一番感動したのは助産院だ。実際、東京・国分寺市の矢島助産院で何回か見学させてもらったが、自分も将来妊娠した時には、日本に帰って矢島先生のサロンで子供を産みたい気持ちになったぐらいだ。温かい、アットホームな雰囲気も良かった上に、その助産婦さんは妊産婦さん一人ひとりに、時間をかけて身体と心のケ

アをしている。

特に、お産に実際立ち会ったときに感動した。機械も薬も使わず畳の部屋で、硬い分娩台の代わりに布団の上で、最初から最後まで付き添ってくれる助産婦さんたちと一緒に、赤ちゃんは自然に生まれてくる。矢島先生は産婦さんの腰をマッサージした。陣痛が来るとその産婦の御主人も助産婦さんと「ファ〜ファ〜ファ〜」と息を出した。そしてお母さん(産婦)は自分の手で自分の赤ちゃんを取り上げて、すぐ抱くこともできた。産婦の身体が健康であり、正常出産であれば、このような形で出産するのが最高だと思う。

将来私がやる助産は、日本で見て学んだ助産の影響を強く受けるにちがいない。日本の助産はとても美しい技術的な助産だと思う。私はアメリカで医療的な助産婦教育を受けても、日本のアーティスティックな部分も取り入れたい。特に日本人の助産婦さんが上手

なタッチケア、その肌と肌のふれあいとコミュニケーション。一般にアメリカ人はよくハグとキスをするけれど、マッサージのような相手を癒すためのタッチングは下手である。アメリカの助産婦も日本の助産婦と比べると、その面では負ける。でも私は日本の助産婦さんをモデルにして、優しい手で、子供を産むお母さんたちを支えたい。

この1か月、日本で出産と助産を研究しているうちに、学生としてだけではなく、ひとりの人間として、また女性として、本当にたくさんの大切なことが分かるようになった。日本の助産婦さん、ありがとう！

